

日付:2014年10月5日／聖書:イザヤ書6:1～13

主題:「神の現臨に触れる」

イザヤ書6章は、イザヤの召命として記されている。《わたしがここにおります。わたしを遣わしてください》と。ただ、イザヤがこの言葉を語る背景を知ることが大事になる。1節に《ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た》とある。これは神の現臨に触れたということである。4節までがイザヤが神を見た表現になっているが、ただその後イザヤは《わたしは言った。「災いだ。わたしは滅ぼされる。…」》(5節)と、恐れおののく言葉がある。神に出会うということは、自らの罪が露わにされ、全てが見透かされ、もう滅び行くしかないような状況に立たされるということであろう。

イザヤはどのような罪に気づかされていったのか？ それは預言者として、十分であったかと思われたのかと思う。時の王、ウジヤの死を待たなければならなかった状況に預言者としての務めは十分であったのか。役立たずの者を神は滅ぼされると、自分を責めたのではなかろうか。しかし、《セラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。…あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。》不十分なこの者を神は赦してください。神の御心にかなわない弱いこの者を神は赦してください。この「罪赦された」という思い、確信が、次に繋がる。《そのとき、わたしは主の御声を聞いた。「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。」わたしは言った。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」》罪赦された者として、主に用いて頂く者とさせられていくのである。

9、10節で、神が民の耳をふさいでいるかのように、心を閉ざさせているかのように、民はかたくなであることを強調している言葉がある。軍事力強化により、軍隊が国を守り民を幸いにすると思いついて民の心は、中々神の言葉に耳を傾けようとしない。イザヤ書2章に《主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう》とある。この言葉は、神の現臨に触れることから始めなければ、本当の意味でこの言葉は響いてこないのかもしれない。私たちの置かれた現状をしっかりと見極めつつ、今日もこのところに居られる主に触れさせて頂き、悔い改めを持って心響かせていきたい。(神谷)